

# 古代日本語の船舶の名称における異層の要素について

——産屋の豊玉姫が和邇の姿をしていたことを中心に——

黄 當時

## 〔抄 録〕

豊玉姫の話の中に、屋根をまだ葺き終えないうちに産気付いた姫が産屋に入り出産する場面があるが、『記紀』は、火遠理命が姫の頼みに背いてその様子を覗いたところ姫は「和邇」や「龍」の姿に変わっていた、と記述している。

「和邇」と「龍」は、同じ情報を伝えているが、適切な海の民の視点を欠いたままでは、正確には理解できない。言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「和邇」と「龍」が「大型のカヌー」であることを解明することができた。古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、ポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 火遠理命、豊玉姫、八尋、和邇、龍

## 1. はじめに

豊玉姫の話の中に、屋根をまだ葺き終えないうちに産気付いた姫が産屋に入り出産する場面があるが、『記紀』は、火遠理命が姫の頼みに背いてその様子を覗いたところ姫は「和邇」の姿に変わっていた、と記述している<sup>101)</sup>。

この「和邇」は、表記に幾つかのバリエーションがある。

『古事記』(上巻)は、「八尋和邇」と表記し、山口佳紀、神野志隆光両氏は、八尋という言葉に、「八」は実数でなく、大きいことの形容、と頭注を付し、大きなわに、と訳している<sup>102)</sup>。

『日本書紀』では、「八尋大熊鰐」<sup>103)</sup>(神代下、第十段、一書第一)、「八尋大鰐」<sup>103)</sup>(神代下、第十段、一書第三)と表記されている。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏は、八尋大熊鰐という言葉に、「尋」は両手を広げた長さ。「八尋」で長い意。→130頁注八。「大」は美称、「熊」は勇猛の意の美称。ただし、東アジアにおいて「熊」を水神とする観念があっ

たとする説もある。「鰐」はサメ。→注十二、と頭注を付し、訳は原文の表記を採用し、八尋大熊鰐、としている<sup>104)</sup>。また、八尋大鰐には頭注を付さず、訳は原文の表記を採用し、八尋大鰐、としている<sup>105)</sup>。

小論では、便宜上、この三者（八尋和邇、八尋大熊鰐、八尋大鰐）を「八尋和邇」の一語に括って考察を進めたい。

ところで、火遠理命が豊玉姫の産屋で見たこの生物/無生物には、「八尋和邇」という表記の他に、「竜」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）という表記もある<sup>106)</sup>。

「八尋和邇」と「龍」<sup>107)</sup>の間には、何ら関連がないように見えるが、同じできごとの報告である以上、両者は同じものを指しているはずである。つまり、用いられた単語に違いはあるものの、伝達しようとする情報には違いがない。『日本書紀』（神代下、第十段、正文）に登場する「龍」は、『古事記』（上巻）や『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）、（一書第三）に登場する「八尋和邇」と同じ生物/無生物と見てよい。

『日本書紀』（神代下、第十段、正文）が提供する、「龍」は「八尋和邇」に同じ、という情報は、極めて重要である<sup>108)</sup>。龍という情報が一つ増えることにより、和邇の解析に失敗しても、龍を解析することにより、正解に辿り着ける可能性が依然として残るからである。そして、言うには及ばないことであろうが、和邇を解析した後に、結論を検証する試金石としても使えるからである。

龍は、通常、想像上の動物を意味するが、火遠理命は、豊玉姫の産屋で想像上の「龍」を幻視したわけではなかろう。和邇と龍の二つの表記は、ある生物/無生物が古代の日本では時代差や地域差あるいは個人差により「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりしていたことを教えてくれている。火遠理命が目にした、「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりする生物/無生物は、一体どのような生物/無生物なのであろうか。

誰しも、「和邇」や「龍」が何であるのかが正確にわかりさえすれば解明の扉を開けられる、という見当はつく。同じ生物/無生物が「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりしていることをどう理解すべきかについて、合理的な解説や説明が全くなされていないが、それは手の出しようがないからではないのだろうか。海の経験の乏しい私たちに、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識等が不足してはいないのだろうか。

『古事記』は、火遠理命は産屋を覗いた後驚いてすぐさま逃走した、と記述しているが、事実ではない可能性が極めて高い。『古事記』の記述が事実とすると、どうしても矛盾が生じてしまうのである。私たちは、どこに矛盾があるのか、具体的には、どこまでが事実でどこからが事実でないかを見極めねばならない。矛盾を孕む記述を鵜呑みにしたままでは、解析結果は、当然ながら、信頼度の低いものでしかない。

『古事記』では、八尋和邇を見た人物と逃走した人物があたかも同一人物であるかのように

記されているが、八尋和邇を見た人物と逃走した人物は同一人物ではないだろう、と考えてよいものと思われる。そもそも、逃走した人物などいなかった可能性もあるのではないか。

解析者にとって、火遠理命が和邇の大きさを八尋と観察し報告していることは、極めて重要な意味を持っている。

ここで見落としてはならないことは、和邇と呼ばれる生物/無生物の大きさが、例えば、七尋や九尋ではなく八尋であることを報告するには、報告者は実際にその大きさを測定し、七尋や九尋ではなく八尋であることを確認しなければならない、ということである。

形状の観察はもちろんのこと、大きさについても正確な数値を入手しそれを報告できる者が「即見驚畏而」することはあり得ない。言い換えれば、火遠理命は、和邇の大きさを測り八尋という数値を入手したが、決して、驚いて逃げてはいないのである。

火遠理命が驚いて逃げたという記述は、決して、火遠理命の見せた反応や行動ではなく、どうやら、『古事記』の編纂者が語部の伝承に自己の創作を書き加えたものであるらしいことが見て取れる。『日本書紀』の記述内容と対比すればよくわかるが、『古事記』のこの個所の記述は、海の民の言語や文化を理解しない何者かの手によって加筆されたようである。加筆は、和邇（や龍）の意味が理解できなくなった後になされたものであろう<sup>109</sup>。

ここには見落としてはならないことがもう一つある。それは、火遠理命はなぜ逃げ出さなかったのか、ということである。言い換えれば、火遠理命は、和邇と呼ばれる生物/無生物が自分に危害を加える恐れがないことを認識していたのではないか、ということである。

さて、日本には、いわゆる爬虫類の鱈は、大小にかかわらず、生息していないので、この「八尋和邇」は、その大きさから見ても、いわゆる爬虫類の鱈ではないらしい、と考えてよさそうである。恐らく、「ワニ」という音声、あるいは、「ワニ」に似た音声で呼ばれた何らかの生物/無生物だったのだろう、と考えてよいであろう。さらには、八尋（14.4メートル）という大きさから見て、生物であることは、検討の対象から外しても差し支えはなさそうである。そうすると、「八尋和邇」は、何らかの無生物であろうが、このような無生物に身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることは、極めて難しい。この無生物の大きさ（長さ）が八尋（14.4メートル）であることを考えると、発泡スチロールのような軽い材料で作られた物でない限り、ほぼ不可能である。その上、この産屋に、八尋（14.4メートル）の無生物が前後左右に動ける空間があったことになるが、実際には、そうではなかったのではないか。

『記紀』は、産屋の大きさに言及しないが、大西一彦氏は「鶴羽神社の縁起と浦生の語源」の中で、高松市史を引用して、「社伝には上古豊玉姫命がこの地に八尋の産殿（ウブヤ）を造られそこでウガヤフキアエズノミコトをお生みになった。それからここを八尋島とよぶようになり、のち八尋島が八島となり、更に屋島になったと伝えている」と述べている<sup>110</sup>。

急ごしらえの産屋にしては、八尋の大きさ（長さ）はかなり立派であるが、この物語の内容

からすれば、この程度の大きさは必要であろう。鵜羽神社の社伝は、この物語の中に八尋和邇が登場するために、単純にサイズを合わせた記述をしているだけの可能性もあるが、社伝が提供する情報は、私たちの解析に重要な役割を果たし得るものと見てよかろう。以下、産屋の大きさ（長さ）は八尋であった、としておく（幅は未詳）。

火遠理命は、豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる無生物の側で陣痛に苦しむ姿を見たのではないか。火遠理命は、そのことを報告したのであろう。そして、語部にその報告を伝承するよう指示がなされたであろう。語部は、特殊な能力を持つ人々である。その伝承は、極めて高い精度でなされたが、コピーを繰り返す内に、劣化を免れることは、残念ながら、できなかった。伝承は、やがて、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる生物になってうごめく姿を見た、とまで劣化したのであろう。八尋和邇と呼ばれる無生物は決して危険ではなかったのにもかかわらず、『古事記』は、火遠理命は見ただけで逃げ出した、としてしまったのではないか。

この問題は、手のつけようがないように見えるが、仮に、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点にもう少しでも近づけることができるならば、何とか理解できそうにも見える。この説話を残した人々の視点とは、いわゆる海の民の視点であるが、具体的には、彼らの言語や文化についての知識ということになる。

言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。小論では、有用な知見を手掛かりに、さらに必要最小限の知識を入手しつつ、解析を進めていくことにしたい。

## 2. 先達の知見

言語については、これまでの研究には見るべきものがほとんどないが、二人の先達が「枯野」解明の過程で示したものが有用と思われるので、見ておきたい。

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後、カリブ海の原住民から伝えられたものであり、そのアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。茂在氏は、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった<sup>201)</sup>。その説は、重要な提言ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している<sup>202)</sup>。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。氏の知見は、今後、私たちが古代日本語における船舶の名称を解明する際に拠って立つべき極めて重要な足場となる。

### 3. 『万葉集』の例

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので<sup>301)</sup>、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えてみたい。

・・・『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃舟（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三三六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、（四三三六）の「伊豆手夫禰」<sup>302)</sup>と（四四六〇）の「伊豆手乃舟」<sup>303)</sup>である。

外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法がある。

中国語では、どちらも漢字で表記することになるが、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「カ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、[ジョッキに入れた]生ビール；信用卡、クレジットカード）。ところが、「啤」や「カ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「外来語＋類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語に既に存在している。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫禰」や「舟」という類名を加えて、「手夫禰」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、どちらも、「手乃」と呼ばれる船である。表記の違いは、（四四六〇）では、「手乃」をそのまま使うことができたが、（四三三六）では、音節数の制約を受けて、やむなく一文字省略せざるをえなかった、ということから生じている。そして、歌人は、一文字省略するに当たって、前の「手」を略して後の「乃」を残したのではなく、後の「乃」を略して前の「手」を残したのである。

もちろん、逆に、（四三三六）で「手」と詠まれた船を、（四四六〇）では二音節で詠むため

に、「手」に「乃」を後置して「手乃」とした、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、意味は取れなくとも、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは見て取れる。なお、「手」は、意味も知らずに訓みを一つ当てただけであって、歌人が「手」と詠んでいた可能性を排除してはいけない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」と「て」の二音が存在していたと考えてよい。

次は、(三一七二)の「熊野舟」<sup>304)</sup>、(〇九四四)の「真熊野之船」<sup>305)</sup>、(一〇三三)の「真熊野之小船」<sup>306)</sup>である。

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、同じタイプのもを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の関係で「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の「安之我良乎夫祢」<sup>307)</sup>である。

先の例と同じく、これらの単語も「外来語+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

「小/乎」を「を」と訓むのは、後人の訓み誤りで、歌人は、「こ」と詠んでいたはずである。後人は、万葉人がたまたま使った「小/乎」がたまたま「を」と読めるために、接頭語か形容詞と誤解したが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と訓むべきものである。この訓み誤りは、「小船」や「乎夫祢」の語義がわからなくなってしまったことに起因している<sup>308)</sup>。

漢字がわかる者は、字形の示唆する意味からなかなか自由になれない。この問題もそうだが、漢字が表音のために用いられていることを見抜かねばならないケースでも、字形で解け(た気分になれば)、思考がそこで停止してしまう。

歌人は、表音のために「小」や「乎」を用いたのであり、その字形が示す意味は特に考慮されていない、と考えてよい。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟の大きさを連想することはない。ところが、「小船」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまうのも無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する音訳の外来語ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は「kau」を書き記

したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃 (tau-nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、(四三三六)の「手 (tau)」が(四四六〇)の「手乃 (tau-nui)」と同じ大型船を指すように、大きいことを明言する場合を除き、「手 (tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーが大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎 (kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手 (tau)」が使われ、熊野や足柄では「小/乎 (kau)」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手 (tau)」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎 (kau)」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、枯野/軽野; kau-nui、狩野<sup>309</sup>); tau-nui、手乃) と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手; kau、小/乎) があつたことがわかる

#### 4. 無目籠

海幸彦・山幸彦の話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。この船には、幾つかの名称があるが、『日本書紀』(神代下、第十段、正文)は、無目籠<sup>かたま</sup><sup>401)</sup>、と表記し、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、藏中進、毛利正守1994は、密に編んだ隙間のない籠<sup>かご</sup><sup>402)</sup>、と訳している。

籠<sup>かご</sup>は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。大事な任務を持って遠くへ出かける時にわざわざ造って乗るようなものではない。

茂在氏は、次のように述べる<sup>403)</sup>。

・・・無目堅間小舟・・・は御存知であろう。・・・在来は目つぶしをした籠の舟と訳しているこの船。無目は水密なと訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといったら、「カタマ小舟」と訳すのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。・・・もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏が、「籠<sup>かたま</sup>」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功績は極めて大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域



を出るものではない。水密でない船は、水上の乗物としては不適當である。『記紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目が無い」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、単に龍と言うことがある<sup>404</sup>。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の装飾が施され、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい<sup>405</sup>。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられているが、このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章の一つ見ておきたい<sup>406</sup>。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言ひ、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。これが、「無目籠」が船眼の装飾がない船であることを教えてくれている。『記紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目籠」と呼ぶ人々がいたのではないかと。少なくとも、その頃の日本人がそのような文化が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目籠」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目籠」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目籠）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』には、さらに、竹を取って大目籠を作った<sup>407</sup>、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を同時に伝えられる好個の文字と考えられたのではないかと。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で<sup>408</sup>、ある文化圏では無目籠とも呼ばれ、船材に竹を用いている船」である。

「無目籠」が示す全体像には圧倒される。この一語には、タミル語圏の文化と中国江南の文化が織り込まれている。古代の日本人が途方もなく広い地域の人々と交流があったことには、改めて驚かざるをえない。

## 5. 和邇と龍

日本には、いわゆる爬虫類の鱧は、大小にかかわらず、生息していないので、「八尋和邇」は、その大きさから見ても、いわゆる爬虫類の鱧ではなさそうだ、恐らく、「ワニ」という音声で呼ばれた何らかの無生物だろう、という見当はついていた。

さらに、この無生物には、「八尋和邇」という名称の他に、「龍」という名称もあることで、船舶についてある程度の知識があれば、答はほとんど自明のようなものであった。

龍は、通常、想像上の動物を意味するが、火遠理命は、豊玉姫の産屋で想像上の「龍」を幻視したわけではない。火遠理命が目にした龍が龍舟/龍船の龍であることは、言を待たない。

先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「和邇」は「wa'a-nui」を書き記したものであろう。「大型のカヌー」を意味するポリネシア語「wa'a-nui」を、漢字が持つ表意機能と表音機能のうち、後者を利用して書き記したものであり、漢字が持つ意味は考慮する必要がない。

wa'a. n. 1. Canoe, rough-hewn canoe, canoemen, paddlers; a chant in praise of a chief's canoe.

nui. nvs. Big, large, great, greatest, grand, important, principal, prime, many, much, often, abundant, bulky; ....<sup>501)</sup>

火遠理命が豊玉姫の産屋で見た無生物は、ポリネシア語で表現すれば、和邇 (wa'a-nui)、中国語で表現すれば、龍、という大型のカヌーであることがわかった。古代の日本では時代差や地域差さらには個人差により、ある種の船をポリネシア語の和邇 (wa'a-nui) で呼んだり中国語の龍で呼んだりしていたのである。

火遠理命が和邇の大きさを八尋と観察し報告していることは、極めて重要な意味を持っている。八尋という数値は、豊玉姫の産屋に置かれた和邇 (wa'a-nui) が主観的に大きいとか小さいとかではなく客観的に14.4メートルの大きさであったことを伝える極めて重要な情報である。

先に、逃走した人物はいなかった可能性がある、と述べたが、実際、そのような者はいなかったであろう。『記紀』は一々記さないが、実際には、産婆が立ち会っていたであろう。産婆は、豊玉姫が連れて来た可能性もあり、火遠理命が手配した可能性もある。いずれにせよ、臍の緒を切り、子を取り上げた者が立ち会っていた、と考えてよかろう<sup>502)</sup>。

海の民が大型船を使用する場合でも、外洋航海には常に危険が伴い、不要不急の品を積載することはないが、豊玉姫は、その身分の高さを考えると、ある程度、出産用品や嬰兒用品・食品も持参したと考えてよいのではないか。

先に、形状はもちろんのこと、大きさについても正確な情報を入手しそれを報告できる者が「即見驚畏而」することはあり得ない、火遠理命は和邇の大きさを測り八尋という数値を入手したが決して驚いて逃げてはいないのではないか、和邇が自分に危害を加える恐れがないことを認識していたのではないか、と推理したが、実際のところ、火遠理命は、この八尋（14.4メートル）の和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が自分に危害を加えることを心配する必要がなかったし、逃げ出す必要もなかったのである。

先に、八尋の無生物に身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることは難しい、と述べた。また、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる無生物の側で陣痛に苦しむ姿を見たのであろう、と推測した。

実際のところ、人間一人、それも妊産婦一人の力では、八尋和邇と呼ばれた14.4メートルの大型のカヌーに身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることはできない。14.4メートルの和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が身をくねらすことはないが、豊玉姫は、あまりの苦しみに、14.4メートルの和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が前後左右に揺れると形容されるほど、猛烈に身体をくねらせていたのではないか。

伝承は、やがて、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる生物になってうごめく姿を見た、と劣化したのであろう。八尋和邇と呼ばれた大型のカヌーは決して危険ではなかったのにもかかわらず、『古事記』は、さらに、火遠理命は見ただけで逃げ出した、としてしまったのである。

大きさ（長さ）が八尋（14.4メートル）の産屋の中では、八尋（14.4メートル）の生物/無生物が前後左右に動くことは、不可能であるが（左右は可能）、八尋の生物/無生物が動かないのであれば、八尋の産屋にきちんと納まる。

先に、鶴羽神社の社伝が産屋の大きさ（長さ）を八尋であるとするを単純に数字合わせをしているだけと見るのではなく重要な情報を提供するものと見てよいのではないか、と述べたが、実際、極めて正確な情報であることがわかる。産屋は、八尋和邇（14.4メートルのwa'a-nui）の大きさに合わせて造られた、と考えてよからう。

長い歴史の中で、多くのものが消されていくが、何かしら痕跡が残るものである。和邇という名称は、辛うじて残ったが、その意味はわからなくなってしまった<sup>503</sup>。海の民の言語や文化は、受け継がれることのなかった言語や文化なのである。

## 6. おわりに

この問題は、手の出しようがないように見えたが、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点に近づける、具体的には、海の民の言語や文化についての知識を入手することによって、どうにか理解することができた。

和邇と龍は、同じ情報を伝えているが、後人にはそれすらわからなかった。

和邇は、適切な海の民の視点を欠いたままでは、正確に解けることはない。言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点到少しでも近づけ、和邇と龍が大型のカヌーであることを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、ポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101) 『古事記』の原文表記は、以下の通り (山口佳紀、神野志隆光1997. p. 134)。

爾、将方産之時、白其日子言、凡他国人者、臨産時、以本国之形产生、故、妾、今以本身為産。願、勿見妾。於是、思奇其言、窃伺其方産者、化八尋和邇而、匍匐委蛇。即見驚畏而、遁退。

102) 山口佳紀、神野志隆光1997. p. 135。

103) それぞれ、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 166とp. 178の原文表記。

104) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 167。

なお、p. 130頭注8は、以下の通り。

座高から判断すると身長は、の意。「尋」は両手を広げた長さで、一尋は五尺または六尺。「七咫・七尺・七尋」と七の数を用いているのは、中国的か。日本の聖数は八。

また、p. 166頭注12は、以下の通り。

正文では海神が尊を本上に乗せると言ったとあり、この一書では大鰐に乗せて送ったとする。鰐が登場するのは、一書第三 (177頁) と記 (「海のと邇」) で、一書第四では、尊が海中に行く時の乗物が鰐だとする (181頁)。またこの一書第一及び記では、豊玉姫が出産時に鰐の姿になっていたとある。「鰐」は『文選』卷五、左太沖の呉都賦「鰐魚」の劉注に「長二丈余、有四足、似鼉、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之、皆中断、……広州有之」とあり、『和名抄』にもそれを引き「似鰐」と説明する。これは亀甲類の認識であるが、その形態や性質からみれば爬虫類のワニのようでもある。しかし、実物と文字とは一致しない点が多く、しばらくサメ (ワニザメ) に当ると解しておく。

105) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 179。

106) 『日本書紀』の原文表記は、以下の通り (小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 160)。  
豊玉姫方産化為竜。

なお、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、書下して「竜」に「たつ」と読みを振り、以下のような頭注を付す (p. 161)。

『和名抄』に「竜、太都ら、四足五采、甚有神靈也」とある。中国での想像上の霊獣 (『説文』『楚辞』など参照) の概念が日本にもたらされたもの。竜は水の支配神であるから、水をたたえている海の、その海宮 (竜宮) の主、豊玉姫が竜であったわけである。山幸彦が山 (陸上) の支配者であることからすると、姫は異類となる。

107) 考察の便宜上、竜/龍は、以下、龍、で表記する。

108) 正確に言うなら、「龍」は「和邇」に同じ、「八尋龍」は「八尋和邇」に同じ、である。表記の上では八尋の有無という違いはあるものの、実際には龍も八尋であった、と理解してよい。

109) もちろん、この語部 (集団) が、和邇 (や龍) についての知識を喪失したために誤った情報を伝承に混在させてしまい、それを『古事記』の聴取・記録担当者に提供した可能性もある。この場合、この語部 (集団) はどの語部 (集団) よりも早く和邇 (や龍) に関する知識を喪失したものと考えられる。

110) 西村秀己「古代の屋島あれこれ」(古田史学の会・関西九月例会、レジュメ、2006年9月16日)

- 201) 茂在寅男1984。  
「枯野」等の解釈に外来語という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。
- 202) KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>.  
Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.  
これは、管見に入った唯一有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP (夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>) では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137)の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。
- 301) 寺川真知夫1980. p. 141-p. 142. 引用の際の省略個所は、・・・、で示す。以下同じ。
- 302) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 390の原文表記。  
寺川真知夫1980. p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
- 303) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 437の原文表記。  
なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏には窮余の策を講じるしかなかったが、歌の趣では正しく解けるとは限らない。実際、この例でも、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいのに(後述)、逆に解釈をしまっている。趣に頼って「手/手乃」の大小を論じる必要は、もはやない。
- 304) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 369の原文表記。
- 305) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 121の原文表記。
- 306) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 162の原文表記。
- 307) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 464の原文表記。
- 308) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303)で、歌の趣では正しく解けるとは限らない、とは書いたが、歌等の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなくろう、と感じられることがあるのではないか。
- 309) 船名としての用例はないようであるが、例えば、伊豆半島にある狩野を冠する地名は、kau-nuiとの深い繋がりから名付けられたものであろう。  
総称の「kau-nui、狩野」は広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。狩野は、茂在氏の挙げる例であるが(茂在寅男1984. p. 20)、他にも、例えば、巨濃郡(このぐん、鳥取県)、金浦(このうら、秋田県由利郡)がある。「kau-nui」との深い繋がり名付けられたものであろう。「tau-nui」も見落とせない。田浦(たのうら、長崎県福江市)がそうであろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。
- 401) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 157。
- 402) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 157の現代語訳。
- 403) 茂在寅男1984. p. 3-p. 4。  
なお、松永秀夫氏から、カタマランの語源をタミル語とする説はA. C. Haddon and J. Hornel著Canoes of Oceania (Bishop Museum Press、1938年刊、1975年復刻)が初出、との教示を受けたが、未見。太平洋学会編『太平洋諸島百科事典』(原書房、1989年) p. 118-p. 120、「カヌー」(松永秀夫)参照。
- 404) ④飾以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。(罗竹凤主编《汉语大词典》第十二卷、汉语大词典出版社、1993. p. 1459)
- 405) 例えば、唐の薛逢の詩「観鏡渡」に、「鼓聲三下紅旗開、兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟のことである。(羅竹凤主编1993. p. 1459)
- 406) 牧魚人、<http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm>.
- 407) 『日本書紀』(神代下、第十段、一書第一)。
- 408) カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところから従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入って来ている、と考えている(茂在寅男1984. p. 44)。ところで、無目籠は、「無目堅間」(『日本書紀』神代下、第十段、一書第一)とも表記される。琵琶湖畔に「堅

田」と表記し「カタタ」と読ませる地名があるが、この「堅」は、「無目堅間」の「堅」と文字表記が同じであるだけでなく、意味・用法も全く同じである。おわかりであろうが、「堅田」とは、連結したタ (tau、手/田、カヌー)、の意であり、『日本書紀』の「堅間」同様、カタマランのことである。「堅田」は、ここの田圃が他所の田圃よりも固い特徴を持つためにそれを地名としたわけではなかろう。「堅田」は、カタタ (カタマラン) がいつもここを利用し、ここに来ればいつでもカタタ (カタマラン) を見ることができることから付いた地名である、と考えてよかろう。今日、私たちがカタマランという船は、古代の日本語の中では、カタマあるいはカタタであった、と考えられる。古代日本人の言語的な運用能力の高さが窺える地名である。

501) それぞれ、Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 375 と p. 272.

502) 記載がなければ事実もない、という考え方では、恐らく、事実にさほど近づくことはできないであろう。

503) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏が、「尋」は両手を広げた長さ。「八尋」で長い意、と注を施したことは、誤りではないが、後半には意味がない。窮余の策であることは、理解できるが、この手法では、如何なる数値でも難なく説明できることになる。終末期医療に用いるモルヒネ同様、匙を投げた時のみ使うものである。実際のところ、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏には手の施しようがなかったのであろうが、そうであったとしても、もう一つの方法がある。先の方法ほど解けない苦痛を除くことはできないが、ペンディング (後日の解に待つ) という方法である。これであれば、解けない苦痛は相当程度軽減され、誰でも書けるような意味を持たない注を書かずに済む。同所の、「鰐」はサメ、も間違いであるが、同じ間違いでも、注12のように、しばらくサメ (ワニザメ) に当ると解しておく、と断定しない言い方の方がましであった。今後、八尋や和邇をどう理解するかで苦しむことは、もはやない。

#### 〔参考文献〕

< 日文 >

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. 『日本書紀① (新編 日本古典文学全集2)』、小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. 『萬葉集② (新編 日本古典文学全集7)』、小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. 『萬葉集③ (新編 日本古典文学全集8)』、小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996. 『萬葉集④ (新編 日本古典文学全集9)』、小学館。

寺川真知夫1980. 『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』、笠間書院。

茂在寅男1981. 『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

———1984. 『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光1997. 『古事記 (新編 日本古典文学全集1)』、小学館。

< その他 >

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

英文題目

Ethnic Vocabulary Elements in Ancient Japanese Vessel Names…………HUANG Dangshi

#### 〔付記〕

本稿は、平成18年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(こう とうじ 中国学科)

2006年10月19日受理